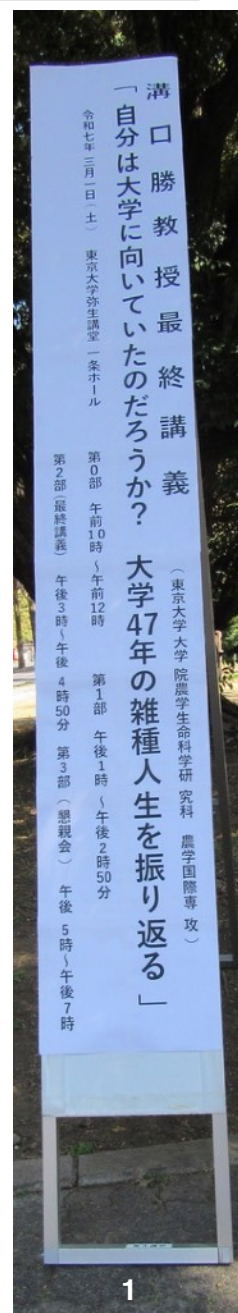


ふくしま

再生 短信

2025年3月1日 溝口勝東大教授最終講義



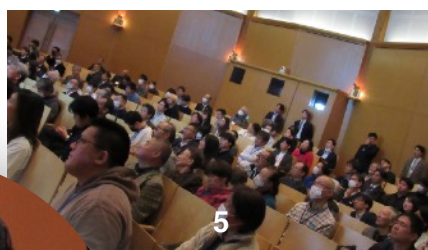
2025年3月1日、溝口勝教授(東大大学院農学生命科学研究科)の最終講義が行なわれた。農学部正門を入ると度肝を抜く立て看板(写真1)。午前10時から終日六部構成。

第0部「10:00-12:00 Mizo-君Taikanトーク」(30年前から付き合いのあった溝口教授と沖大幹教授との対談を二人を良く知る若手研究者がリード)



2 田貢士、新領、域創成

人など) (MHKのプロジェクトMで【溝口の法則】Mizo's lawの真偽を問う。MC: みぞらぼの現役学生)。



准教授。次いで**第3部**「17:00-19:00 懇親会」(会場: 東大農学部弥生講堂ホール) MC: 荒木徹也、

震災直後の冬に飯舘村の水田で凍土剥ぎ取り法を思いついたのは自分が凍土をやっていたからだ。このとき「神様はこの問題を解決させるために今まで僕に関係ないことをさせていたんじゃないか」と思えて体が震えた。放射性セシウムの問題は一人の研究者で解決できる話ではない、わたしの任務は、多くの土壌物理研究者を巻き込みながらこの問題を解決にあたることだと思っ



4

た。(第2部最終講義)

種」人生と学問を語りつくし(写真4)聴衆を魅了した(写真5)。中島みゆき(写真6)から

研究室准教授 **第4部**「19:00-懇親会二次」

では、多くの土壌物理研究者を巻き込みながらこの問題を解決にあたることだと思っ

た。(第2部最終講義)



6

懇親会三次会 **第5部**「20:00-懇親会三次会」と展開。

夜更へとお楽しみ会は続いた。(撮影と文責・若林一平)

第1部 13:00-14:50 出席者と壇上トーク (卒業生、ゆかりのある知



3

第2部 15:00-16:50 最終講義「自分は大学に向いていたのだろうか? 大学47年の雑種人生を振り返る」 MC: 荒木徹也、研究室

第2部、**第3部**を取材

溝口教授よりリンク先情報
最終講義お楽しみ会報告
ハチ公グッズ販売レポート



2025年8月1日、復興農学会誌 第5巻第2号 (2025年7月) が発行されました。

2025年8月19日、土壌物理学国際会議開幕。

ふくしま

1 5 年 ぶ り 山 津 見 神 社 例 大 祭 2 0 2 5 1 2 / 0 4 - 1 2 / 0 6

2025年12月4日〜6日、右福島県相馬郡飯舘村佐須地区にある山津見神社の例大祭が震災後15年ぶりに復活。記者は5日・6日現地。3回にわたり報告する。

恒例「佐須の茶屋」(写真1)

は茅葺の本格構造で参道に展開する露店群(写真



全焼の
惨事から

熱々のおでんやうどんが嬉しい。

3) 輝く堀炬燵(写真に)



② 中心に。各テールブルには煌々と

演 出 野 宮 有 姫、虎
捕山の伝
承から原発
事故を経て、
自然と共生す
る飯館の営み
を現代に問う
(写真5)。

詩の奉納
「辭(ことば)
神楽狼」(詩、
朗読和合亮二)
では作者の

じられたの
は「虎捕
山縁
起」
(作)



朗々とした音声（おんじょう）が杜に響き渡る（写真6）。

祭りの賑わいの中で会場内を走りまわる若い皆さんの姿に祭りの新しい形を垣間見た。

春以来、佐須氏
総代会（佐藤公一
代）、図図倉庫グ
ループ、ふくしま
再生の会ほかの
参加により山津
見神社例大祭実
行委員会（阿部
猛会長・田尾陽一
希望の夜である。

（写真4は伊賀和子さん提供・他は筆者撮影、文責・若林一平）



再生の会の参拝団有志は5日夕刻、2016年復元オカミ絵奉納当時の氏子総代菅野永徳さん宅訪問。永徳さん、久美さんが学生さんとお参りに来てくれました。加藤久美と歌山大学大学院観光学研究科教授は天井絵復元の役者のひとり、ありがたみを込めてのことだ。

ふくしま

再生 短信

山津見神社例大祭2025 12/04-12/06 第2部オオカミベンチ

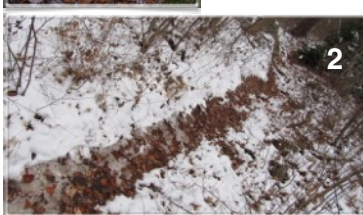
オオカミ

狼はどこへ行った？

・山津見神社のオオカミ
天井絵は、1904（明治37）年に拝殿が建設されるにあたって描かれた。オオカミを描いた絵としては全国でも類例のない大規模なものだった（『人間と自然の共生』山津見神社例大祭実行委員会、2025年11月25日発行）。奇しくもこの年、日本列島最後のオオカミが消えた。オオカミはどこへ行った？この根源的問いを発し続けているオオカミベンチの作者・鴻池朋子のメッセージ『狼はどこへ行った？Where have all the wolves gone?』が例大祭当日、参拝客に配布された（左下開み）。作者は言う「私が飯館という場所が地球の『へそ』みたいだと感じるの、自然豊かな場所であり大きな

災害があった場所であると同時に、それによって場の時間軸が変わり普遍性を帯び、人間界と自然界の結界のように感じています」。

2025年12月5日午後2時、再生の会の有志参拝団一行は本殿の参拝へと向かった。オオカミベンチ

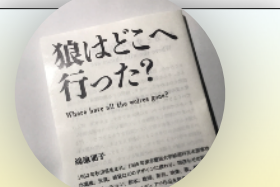


静かに参拝客を待つ佇まい（写真1）。自然と人間が共生するその結果（けっかい、境界）に位置するのだ。大人二人がゆったりと腰掛

チは拝殿裏の本殿参道入口に鎮座し

けて来し方行く末に思いを馳せる。参道は溶けかかった雪道で滑りやすい（写真2）。本殿鳥居（写真3）に向かう急坂手前で折り悪しく雪がちらつき始めた。記

者は下山の不安が過り、本殿（写真4）参拝を若手の二宮康剛さんに託した。下りは特に滑り易くオオカミに守られた道々を実感し安堵した。（写真3、4は二宮康剛さん・1、2は筆者撮影、文責・若林一平）



鴻池朋子

1960年秋田県生まれ。1985年東京藝術大学絵画科日本画専攻卒業後、玩具、雑貨などのデザインに携わり、現在もその延長で、アニメーション、絵本、絵画、彫刻、映像、歌、影絵、手芸、おとぎ話などを発表している。場所や天候を巻き込んだ、屋外でのサイトスペシフィックな作品を各地で展開し、人間の文化の原型狩猟採集の再考、芸術の根源的問い直しを続けている。

ふくしま

再生 短信

山津見神社例大祭 2025 12/04-12/06 第3部 (最終回) トノ オオカミに祈る

トノ オオカミに祈る

2025年12月6日午前11時、トノこと相馬中村藩第34代当主、相馬行胤(ソウマミチタネ)さんが飯館村の村内巡回を経て山津見神社参拝に訪れた。拝殿の参道前で乗馬から降り、氏子のみなさんが待ち受ける中(写真1)、先

ずは復元なつたオオカミ天井絵の下に現れ(写真2)、氏子のみなさんと共に参拝



に臨んだ

(写真1)

3。

トノは言

う「2011年未曾有の大災害が起きた後、私の唯一の

道標は幾多の困難を乗り越えてきた先人たちの教えでした。歴史に希望を見出し、私どもに伝えてくださった大切なものを次世代に引き継ぎ、1000年続いてきたものをさらに1000年続ける。それこそが長きに渡りお世話になっている故郷のために私にできる唯一の事だとおもっております。あの日から12年以上の月日が経った今年、私たちは新たなステージに

向かいます。(2023年8月1日、人と馬と自然とが共生する「巖(ノーマ)の谷」<https://nomavalley.jp>)

トノは参拝を終えて終始にこやかにオオカミのお面を手にして参拝客の中に入り歓談(写真4・5)、「例大祭

のみなさまに感謝します」との言葉を残して



再び馬上の人となつた(写真6)。

(写真2、3は佐藤俊雄さん・他は筆者撮影、文責・若林一平)



であり、近世には軍事演習の役割も果たして現在まで引き継がれている」。(福島県立美術館副館長・増淵鏡子、「人間と自然の共生 山津見神社オオカミ天井絵復元して未来へ」第3章、山津見神社例大祭実行委員会、2025年11月25日発行)



山中郷 産馬とオオカミ信仰
「まず結論として、飯館(村域は「山中郷」)は江戸時代から馬の産地で、馬を襲うオオカミを畏れたことが、信仰に結びついたのだと思われる。・山中郷は、ほとんどが山間部の高冷地であったため、耕地からの収穫を基本とする江戸時代を通じて自然災害に苦しめられた。・相馬全域に及んだ窮乏に対処するため、藩で奨励したのが馬の育成であった。・1843(天保14)年、相馬益胤は無償で厩と馬を貸し与え飼育させた。とりわけ原野に富み、真野川などの川が流れる山中郷は放牧に適していたため、領内随一の馬産地とされた。・相馬地区の重要な伝統行事である「野馬追」は、相馬家が妙見神に馬を奉納する神事

ふくしま

再生 短信

2026/3/13 里山ぶどう園剪定作業同行記

ぶどう園の戦略的剪定です



剪定(せんてい)とは「果樹の生育や結実を調節するため、枝の一部を切り取ること。」『大辞林』第3版より

年3月13日午後、始めのミーティングで里山再生(ブドウ栽培含む)チームリーダーの小原壮二さん(写真1)「ぶどう園の戦略的剪定です」のひと言。

この日の作業にはかねてよりぶどう栽培の一般的な指導助言を頂いていた二本松市東和町の、熊谷耕一さん(写真2)と本多和弥さん(写真3)、二人の師匠を迎え、剪定教室を兼ねた豪華版の作業デーとなった。作業には地元から高橋利明さん、福島大農林サークルの中山拓海

(文責&撮影・若林一平)